

失われた東山大仏殿

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
南 孝雄

1. はじめに

方広寺大仏殿は、永禄10年（1567）に焼亡した東大寺大仏殿に代わるものとして、豊臣秀吉が天正16年（1588）から文禄4年（1595）までの約7年の歳月をかけて造営したもので、その規模は創建時の東大寺大仏殿を凌いだ。方広寺大仏殿の中心は、京都国立博物館の北側の大仏殿跡緑地公園付近で、平成知新館の玄関が大仏殿院の南門跡にあたる。

豊臣秀吉・秀頼親子が築いた方広寺大仏殿は、江戸時代に落雷による火災で地上から姿を消すが、地中には秀吉・秀頼が築いた方広寺に関連する遺構が眠っている。今回は、発掘調査成果を中心に方広寺の歴史をみてみたい。なお、方広寺の名称は秀吉・秀頼在世期には用いられていないようである。当時は「東山大仏」「新大仏」「大仏殿」などと呼ばれた。ここでは、「東山大仏」とともに、一般的に知られている「方広寺」の名称を併用する。

2. 方広寺大仏殿の歴史

大仏殿が完成した翌年の文禄5年（1596）、慶長伏見地震により塑像の大仏（初代）は大破する。慶長3年（1598）に秀吉が死去した後、豊臣秀頼が本尊のなくなった大仏殿の中で鑄造による造仏を開始するが、慶長7年にこの作業中に失火、大仏殿もろとも炎上する。秀頼は慶長13年に大仏殿再建に着手、慶長19年に大仏（2代）と共に完成する。この再建は財政的には豊臣家の負担によるものであったが、徳川家康の意向も存在したとされる。しかし鐘銘事件の後、大坂冬・夏の陣で慶長20年に豊臣氏は滅亡、大仏殿は落慶法要を迎えることなく、三十三間堂とともに妙法院の管理下に置かれる。

なお寺域は、秀吉期は妙法院境内に大仏経堂がある他は、大仏殿が築地堀で囲み囲まれるだけであったが、秀頼期に蓮華王院（三十三間堂）と一体化し拡大する。この際に現在も残る南大門と太閤堀が造られる。なお、秀頼期大仏殿は、秀吉期の規模は同じであるが、屋根構造が変化し腰屋根が本体の屋根よりも外に張り出す。江戸時代に再建された東大寺大仏殿は、秀頼期大仏殿がモデルとなったようである。

江戸時代の東山大仏は京の名所となり、いくつかの洛中洛外図にも描かれている。寛文2年（1662）の寛文近江・若狭地震により大仏殿が損傷、大仏は大破し木製仏に作り変えられる。更に寛政10年（1798）落雷により大仏殿・大仏ともに全焼。天保年間（1830～43）に仮堂と半身仏が造られるが、昭和48年（1973）に火災により全焼する。

3. 方広寺跡の発掘調査

方広寺の発掘調査は、1978年の京都国立博物館西面にある方広寺の巨大な石垣の修理に伴う調査に始まる。その後、平成知新館の建設など、構内の整備事業に伴いこれまで22回にわたって行われてきた。

1998～99年に行われた平成知新館建設に伴う事前調査では、大仏殿院南門・回廊・石垣・梵鐘鑄造遺構などが検出され、大仏殿院南限が確定した。2000年の緑地公園整備の調査では、大仏殿基壇が検出され、大仏殿の遺構が地中に残されていることが初めて確認された。2008年の平成知新館建設に伴う事前調査でも南門北東隅が検出され、南門の規模が確定した。2013年の博物館北側の調査では、1辺約4mの巨大な礎石据付けの壺地業が4基と大仏殿基壇東辺が検出された。2020年の明治古都館北側の調査で秀吉期の築地堀の礎石が初めて発見された。

石垣：大仏殿の造営にあたり最も早く造られた構造物。石垣の高さは約3.1mである。西面は約260m、北面は約265mが現存し、南面は発掘調査で105m、南門まで築かれていたことが判明した。石は積むというよりも巨石を置き並べており、大きくは巨石1石の部分と2段積みの部分とに

分かれる。石は厚さが0.6m程度の扁平な石を用いている。裏込め礫層の厚さは約3mあり、礫と共に石仏や墓石が含まれる。

大仏殿：規模は、発掘調査のデータや史料から復元出来る。桁行（長さ）が約88m、梁行（奥行）は約54m、高さは51mである。これは東大寺大仏殿の江戸時代再建期の桁行：57m、梁行：51m、高さ46mはもちろん、奈良時代創建期の桁行：86m、梁行：51mをも凌ぐ。礎石は方広寺境内に残されており、平面形は長方形で2.4×2m、厚さ0.8mの巨大な礎石である。礎石は、壺地業が施された礎石据え付け穴の上に設置されたことが調査で判明している。壺地業は1辺約4m、深さ約1mの掘形内を礫と砂質土で版築している。基壇は秀頼期に1m程拡張している。

なお、用材は全国の大名から集められており、大坂城や聚楽第と共に天下普請により造営がなされた。柱は、秀吉期は一本の巨木であったようだが、秀頼期は寄木であり、それを束ねる鉄輪が方広寺境内や京都国立博物館構内に残されている。また、大仏殿を装飾した風鐸や大仏の台座の一部も方広寺に残されている。風鐸は、銘文から三条釜座の名越三昌によるものである。

築地と回廊・南門（中門）：大仏殿を囲む施設は、秀吉期が築地塀で秀頼期は回廊であった。

秀吉期の築地塀の寄柱の礎石は、長さ約1m、幅約0.5mで柱間は3.3mである。石材は花崗岩で非常に丁寧に仕上げられている。石材を割る際に穿たれる矢穴は、京都新城（慶長2年・1597）と同じ古Aタイプ（森岡秀人氏分類）である。

南門（中門）は回廊と共に秀頼期に設けられた。南門は礎石据え付け穴が10基確認され、桁行3間（13.5m）・桁行2間（8.1m）の八脚門であることが確認された。

4. まとめ—その後の大仏殿—

寛文2年（1662）の近江・若狭地震により大仏殿に一部被害、大仏は大破し、大仏は木造仏に造り替えられる。その約百年後の宝暦年間（1751～1764）には大仏殿もかなり損傷が進んでいたようで、妙法院では修理を計画、その資金集めを始める。しかし、巨額を要する大仏殿修理費用の調達が可能には進まないなか、寛政10年（1798）の落雷による火災により大仏殿と大仏は全焼する。この際に廃棄された多量の瓦が発掘調査で出土している。天保14年（1843）に尾張国の商人などから上半身のみの仮の大仏と仮堂が寄進されるものの、寛政10年火災後、東山に大仏と大仏殿が再建される事は無くなる。

秀吉は、大仏殿の東、阿弥陀ヶ峰に葬られ、自らを神として祀る豊国神社をその麓に造営する。また、妙法院内にあった大仏経堂で先祖供養を行い、鶴松の菩提寺である祥雲寺（現智積院境内）は大仏殿建設中の文禄2年（1593）に竣工している。大仏の造営が東大寺大仏に代わるものであったとすると、その目的は国家の安寧ということになるが、秀吉は大仏殿周辺を豊臣家の霊地とする意図がある様にもみえ、東山大仏もその中に組み込まれたものといえる。そのような意図も豊臣家の滅亡と共に無くなるわけであるが、滅亡後200年近くの間、京の大仏として町衆に親しまれ守り続けられた。

【参考文献】

河内将芳『秀吉の大仏造立』 法蔵館 2008年

河内将芳『秀吉没後の豊臣と徳川』 淡交社 2023年

『季刊大林』57号（特集 秀吉の普請）株式会社大林組CSR室 2016年

『史跡方広寺石塁修復工事報告書』京都国立博物館 1987年

登谷伸宏「秀吉政権と大仏殿の造営」『日本史研究』698号 2020年

長宗繁一「大仏殿復元私案—発掘調査からのアプローチ—」『日本史研究』698号 2020年

内藤 晶・中村利則「ミヤコの変貌—聚楽第と大仏殿—」『近世風俗図譜 第九巻 祭礼（二）』 小学館 1982年

三鬼清一郎「方広寺大仏殿の造営 に関する一考察」『中世・近世の国家と社会』東京大学出版会 1986年

村山修一『京都大仏御殿盛衰記』法蔵館 2003年

森岡秀人「矢穴の型式学」『古代学研究』180号 2008年

山下絵美「方広寺大仏殿遺物」と諸史料からみる名越三昌の事績と活動記録『博物館学年報』同志社大学博物館学芸員課程 2021年

『史跡方広寺石塁修復工事報告書』京都国立博物館 1987年

『京都国立博物館構内発掘調査報告書』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2009年

『法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡』京都市埋蔵文化財発掘調査報告2009-8、2021-3、2023-5 2010、2022、2024年

「方広寺跡・法住寺殿跡・六波羅政庁跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成25年度』京都市文化市民局 2014年

表1 方広寺(東山大仏)関係年表

年 号	西 暦	月 日	事 柄
永禄10年	1567	10月10日	松永久秀により東大寺大仏殿炎上。
天正10年	1582	6月2日	本能寺の変。
天正10年	1582	6月13日	山崎の戦い。
天正11年	1583	8月28日	大坂城築城開始。
天正13年	1585	7月11日	秀吉、関白となる。
天正14年	1586	4 月	秀吉、東福寺周辺を視察。三十三間堂前で縄張り。用材確保を諸大名に命ずる。
天正14年	1586	2月23日	聚楽第造営開始、翌年9月竣工。
天正14年	1586	7月21日	秀吉、東大寺大仏殿跡を測量。
天正16年	1588	5 月	三十三間堂北側にある渋谷の仏光寺を洛中の竜ヶ城跡に移転させ、大仏殿工事開始
天正16年	1588	5月15日	上・下京の住民により大仏殿敷地を地築、石垣普請の衆に酒を下す。
天正16年	1588	6月10日	秀長、大仏製作の為に仏師を大和から上洛させる。
天正18年	1590	7月11日	後北条氏滅亡、秀吉の天下統一なる。洛中で天正地割。
天正18年	1590	冬頃	木食応其、大仏殿造営の統括者となる。
天正19年	1591	5月	立柱工事開始。大仏を金銅仏から漆膠仏に計画変更。
天正19年	1591	閏1月	御土居の築造開始、4月にほぼ完成。
文禄元年	1592	4月12日	文禄の役始まる。
文禄元年	1592	8月20日	指月伏見城築城開始（文禄3年に拡張工事）。
文禄2年	1593	8月3日	秀頼誕生。
文禄2年	1593	9月24日	大仏殿、上棟。
文禄4年	1595	7月15日	豊臣秀次自害、聚楽第破却。
文禄4年	1595	9月21日	初代大仏殿、初代大仏ほぼ完成。
文禄4年	1595	9月25日	妙法院大仏経堂で千僧供養を行う。
文禄5年	1596	閏7月13日	慶長伏見地震により大仏破損、3方の築地が崩壊。大仏殿は無事。指月伏見城倒壊。
慶長2年	1597	2月21日	慶長の役始まる。
慶長2年	1597	4月26日	京都新城築城開始、9/21竣工
慶長2年	1597	7月18日	善光寺の如来像が方広寺本尊仏として到着。
慶長3年	1598	8月17日	秀吉の体調悪化により、善光寺の如来像を返送。
慶長3年	1598	8月18日	秀吉、伏見城にて死去。
慶長4年	1599	4月18日	豊国神社で遷宮の儀式が行われる。
慶長5年	1600	2 月	大仏は金銅仏とし、铸造開始。
慶長5年	1600	3 月	秀頼、大仏殿整備工事に着手。七重塔・講堂・回廊の建設を予定。
慶長5年	1600	9月15日	関ヶ原の戦い。
慶長7年	1602	12月4日	铸造中の大仏より出火。大仏殿炎上。
慶長9年	1604	8月13日	秀吉7回忌の豊国神社臨時祭が行われる。
慶長15年	1610	1 月	2代目大仏殿再建の地鎮祭・手斧始めを行う。
慶長17年	1612	3月24日	2代目大仏殿・大仏完成。
慶長19年	1614	4月16日	梵鐘铸造。8/1が開眼供養と日程が決まる。
慶長19年	1614	7月26日	「鐘銘事件」が起きる。
慶長20年	1615	5月8日	大坂夏の陣、豊臣氏滅亡。豊国神社廃絶。
寛文2年	1662	5月1日	寛文近江・若狭地震のために堂舎と大仏破損。大仏は木像仏（3代目）に作り替え、11/23完成。
寛文2年	1662	12月2日	3代目大仏開眼供養。
元禄5年	1692	3 月	東大寺大仏開眼供養。
元禄7年	1694		東大寺大仏殿再建開始。
宝永6年	1709	3 月	東大寺大仏殿落慶法要。
寛政10年	1798	7月1日	落雷のため大仏殿（2代目）、大仏（3代目）、仁王門、回廊焼失。
文化元年	1804		方広寺本尊、毘盧遮那仏開眼供養。
天保14年	1843	冬	尾張国の有志により4代目大仏（上半身）施入、仮堂が再建。
明治3年	1870		方広寺境内地の多くが国有地となる。
明治13年	1880	9月15日	豊国神社、大仏殿跡地に社殿造営し再興。
昭和48年	1973	3月27日	火災により天保大仏が焼失する。

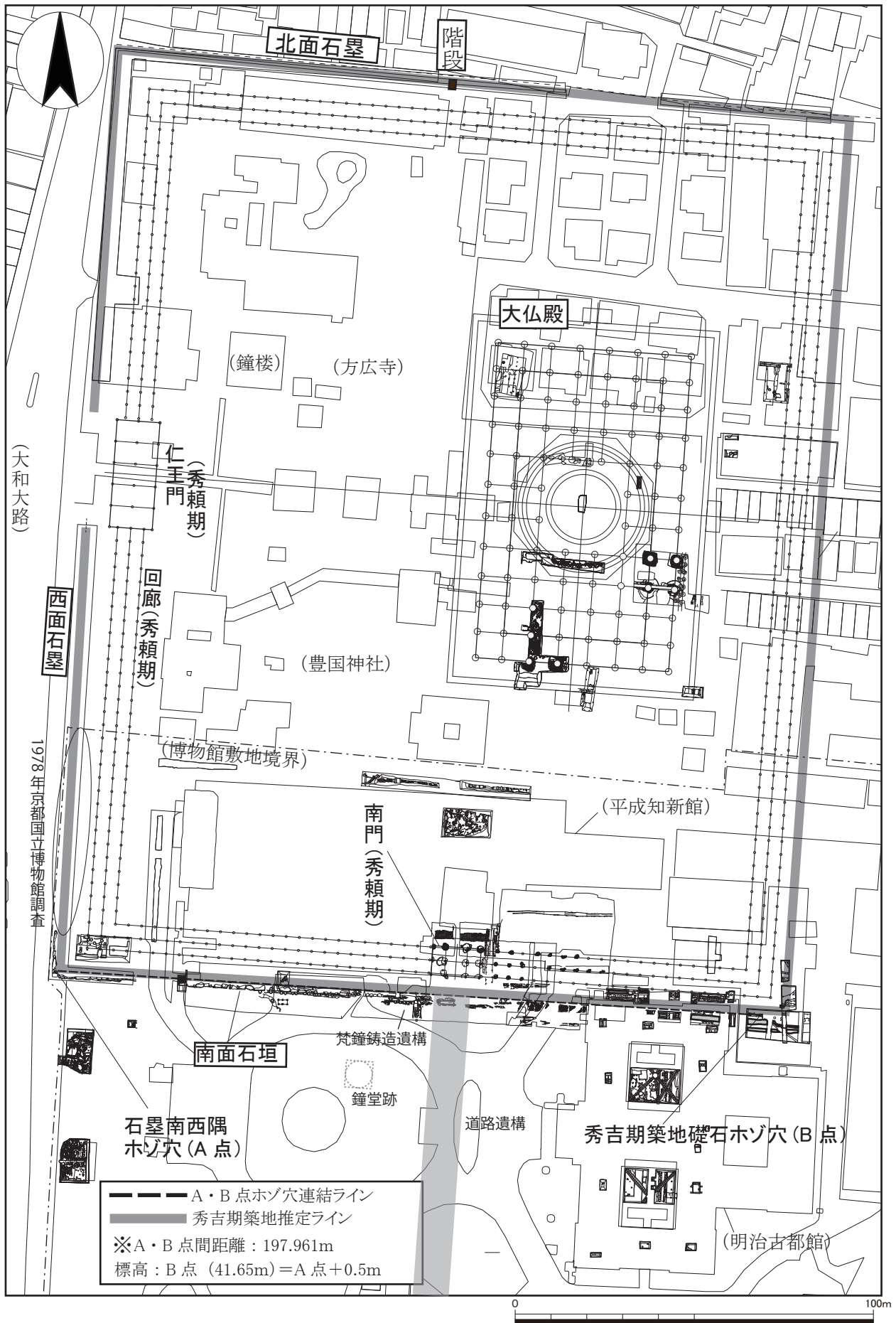


図2 方広寺大仏殿院調査区配置図(1:1,500)

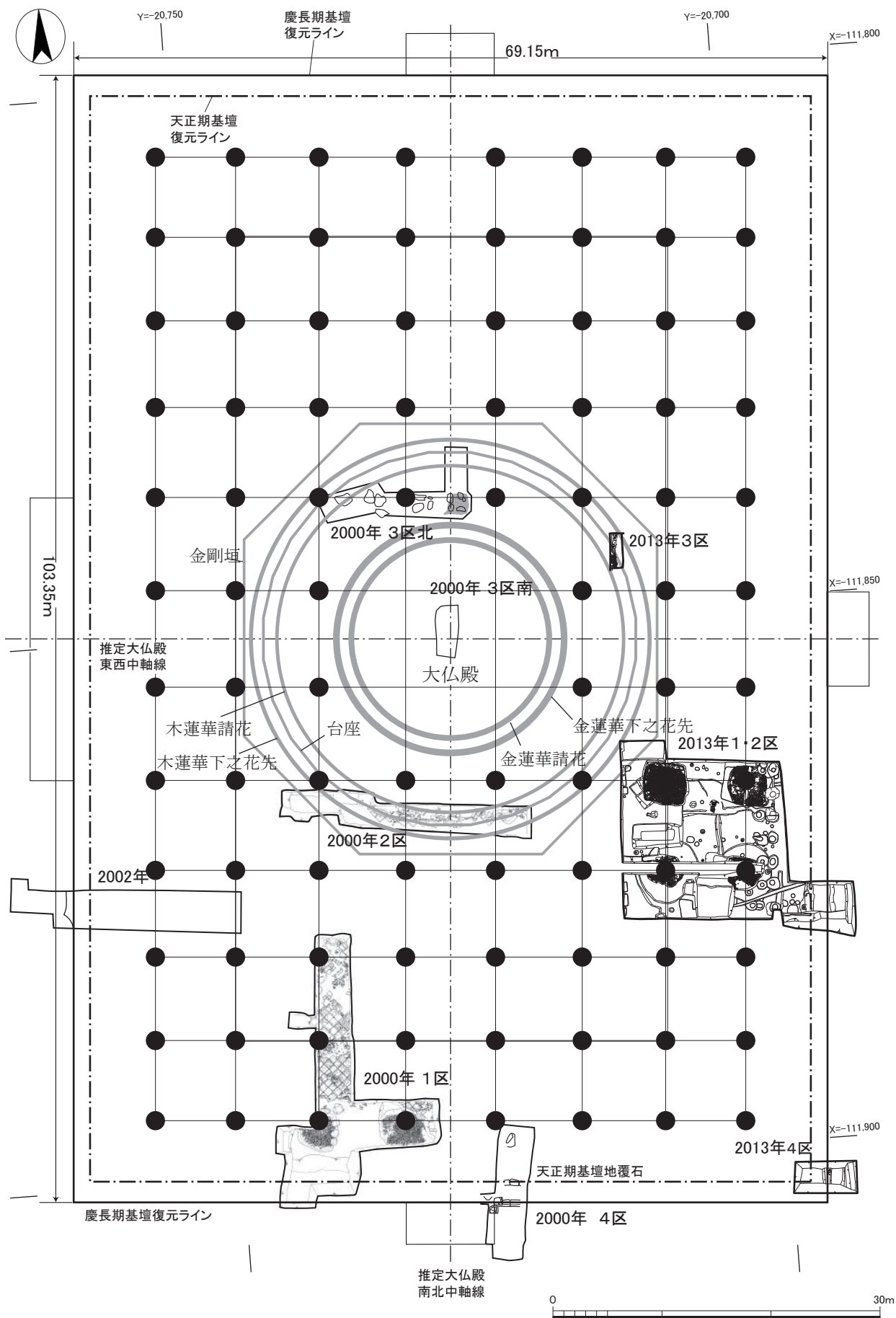


図3 方広寺(東山大仏)大仏殿復元図

(『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-8』長宗繁一氏作図一部改変)

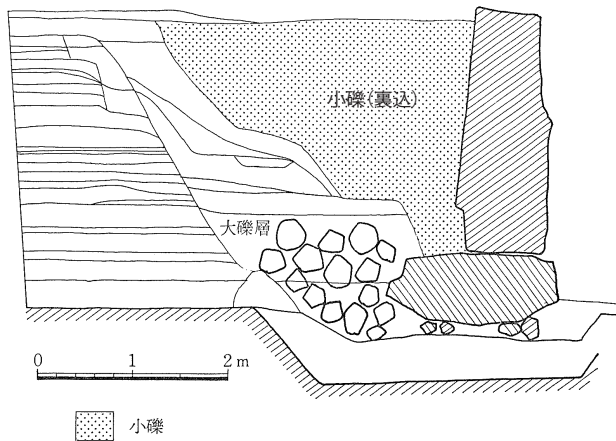


図4 西面石垣断面図、1982年調査



図5 西面石垣背面(南から)、1982年調査

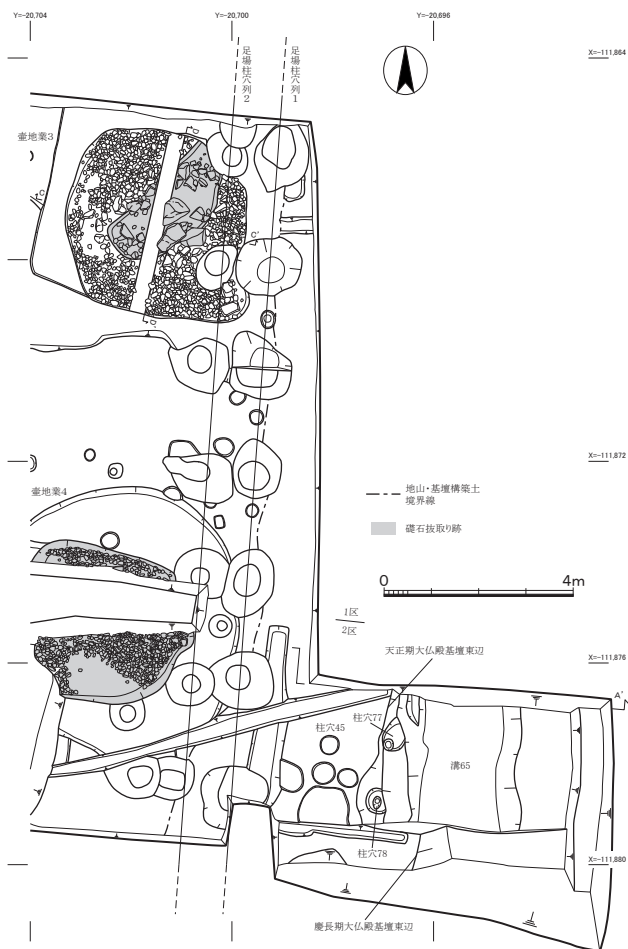


図6 大仏殿壺地業・柱穴列平面図、2014年調査



図7 大仏殿壺地業・柱穴列(北から)、2014年調査

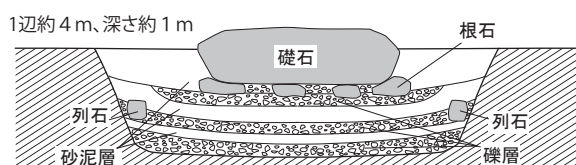


図8 大仏殿壺地業断面模式図



図9 大仏殿壺地業3(東から)、2014年調査

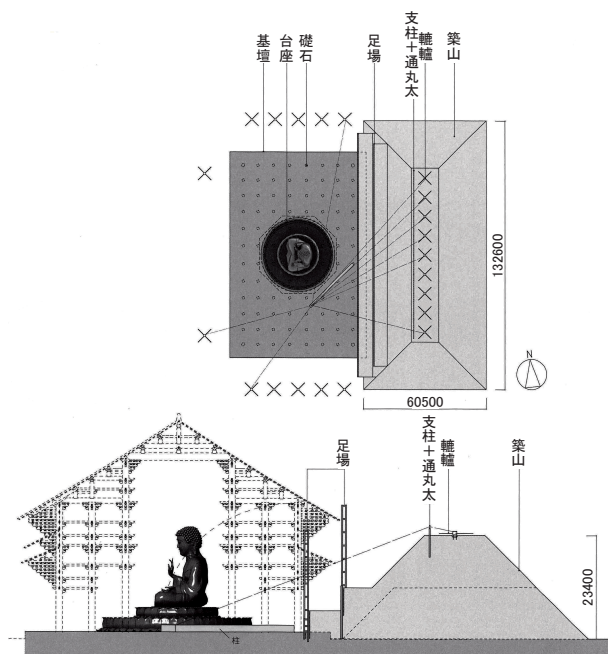


図10築山の配置と立柱方法

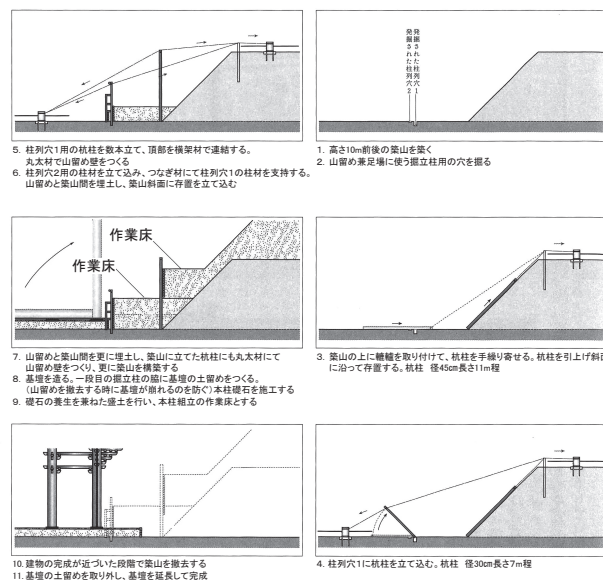


図11 築山構築ステップ図

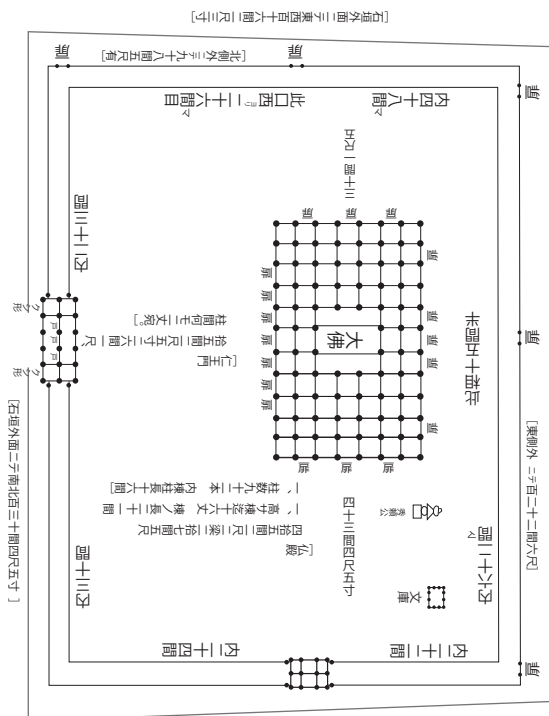


図12 「京大仏総構『愚子見記四』」書起し図

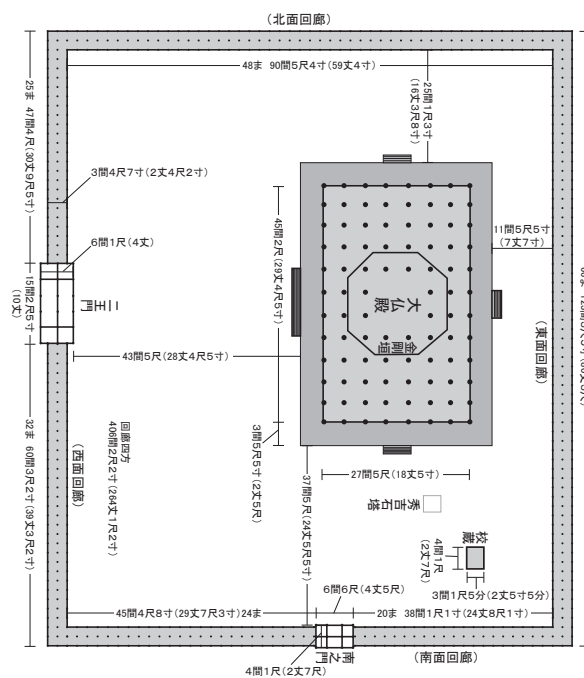


図13 「大仏総指図」(『中井家旧蔵指図』)

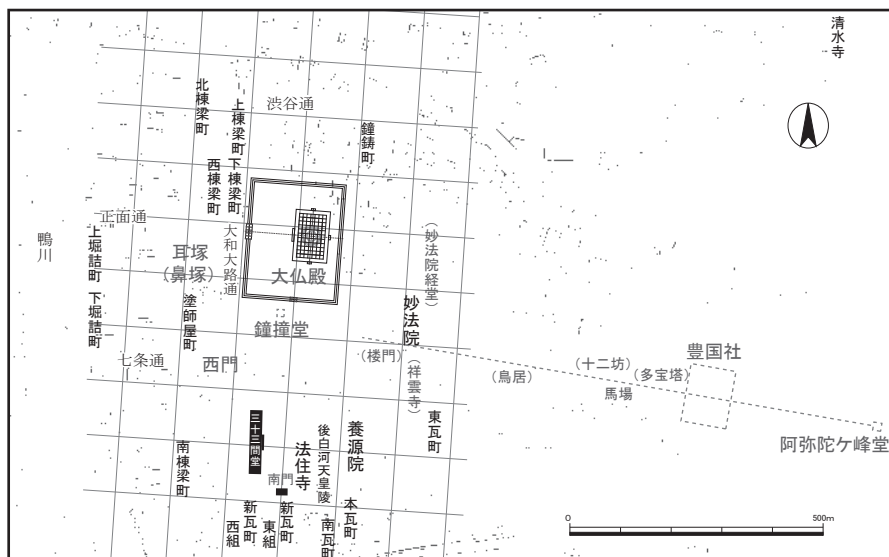
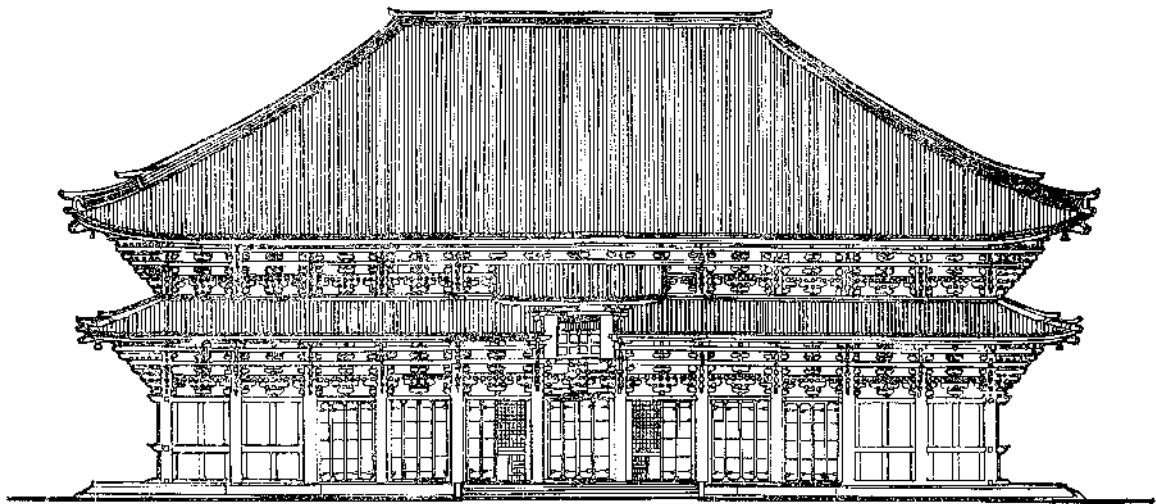


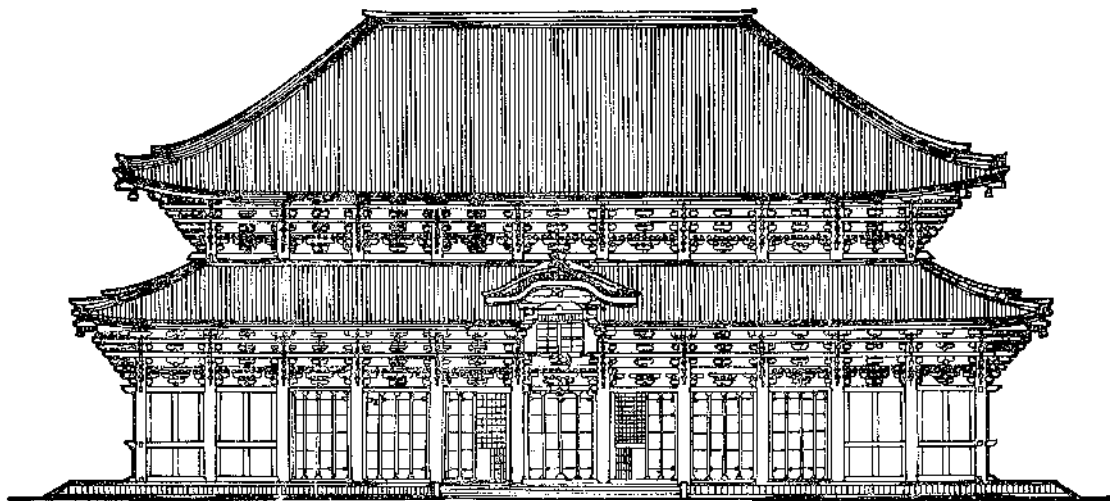
図14 方広寺位置図(方眼109m)

図11・12
『秀吉の普請』季刊大林No.57 2016年
図13～15
『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-8』
長宗繁一氏作図



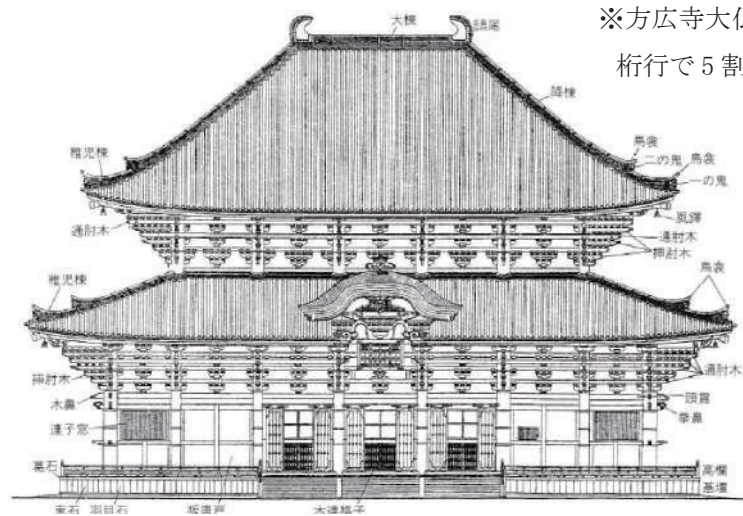
1. 方広寺初代大仏殿（文禄4年・1595）

0 30m



2. 方広寺2代目大仏殿（慶長17年・1612）

0 30m



3. 東大寺3代目大仏殿（宝永6年・1709）

0 30m

※方広寺大仏殿は、東大寺宝永大仏殿の
桁行で5割増し、奥行きも1割増し。

図15 方広寺（東山大仏）・東大大仏殿立面図

（1・2は『近世風俗図譜第9巻』小学館1982、3は『図解社寺建築』理工学舎1993より）

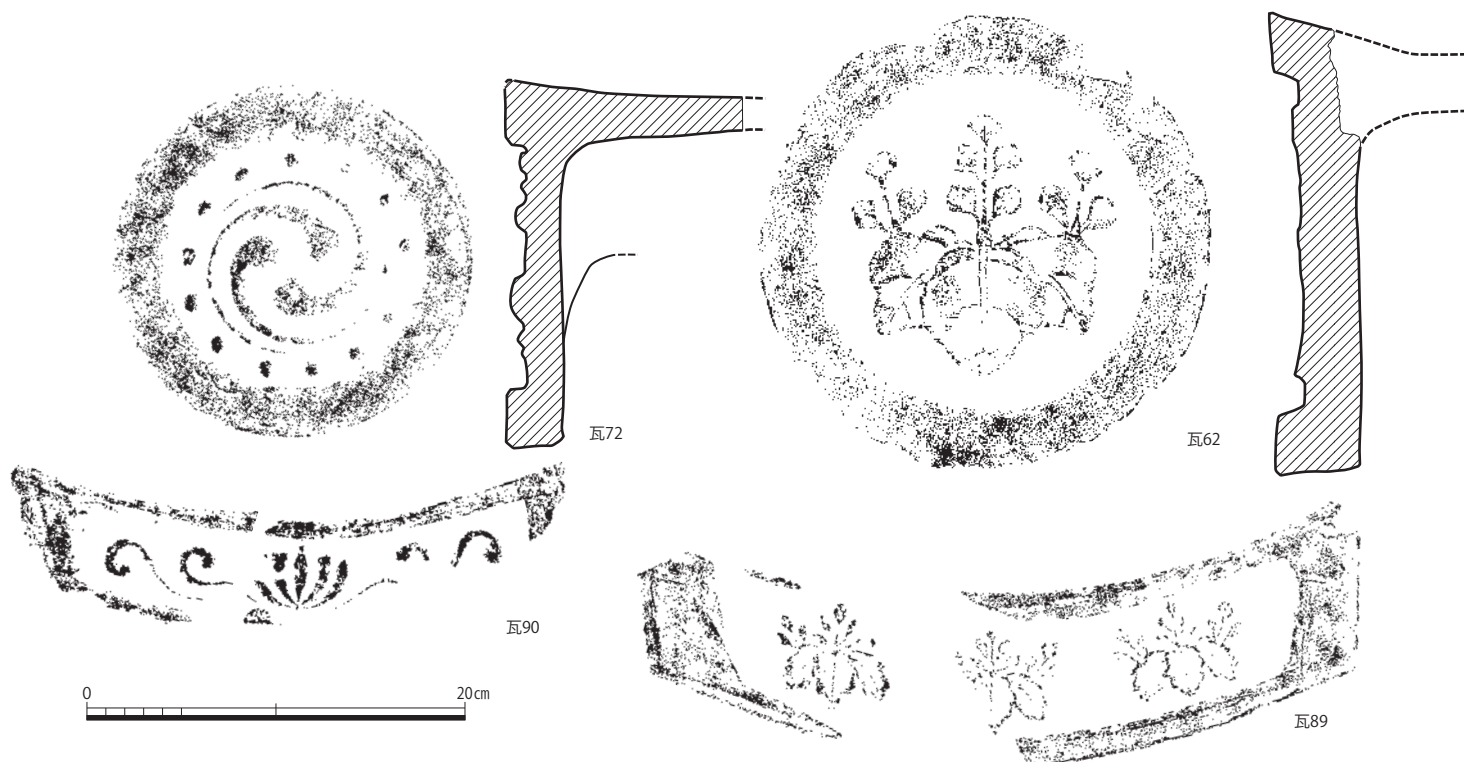


図16 出土瓦拓影・実測図（右が大仏瓦）

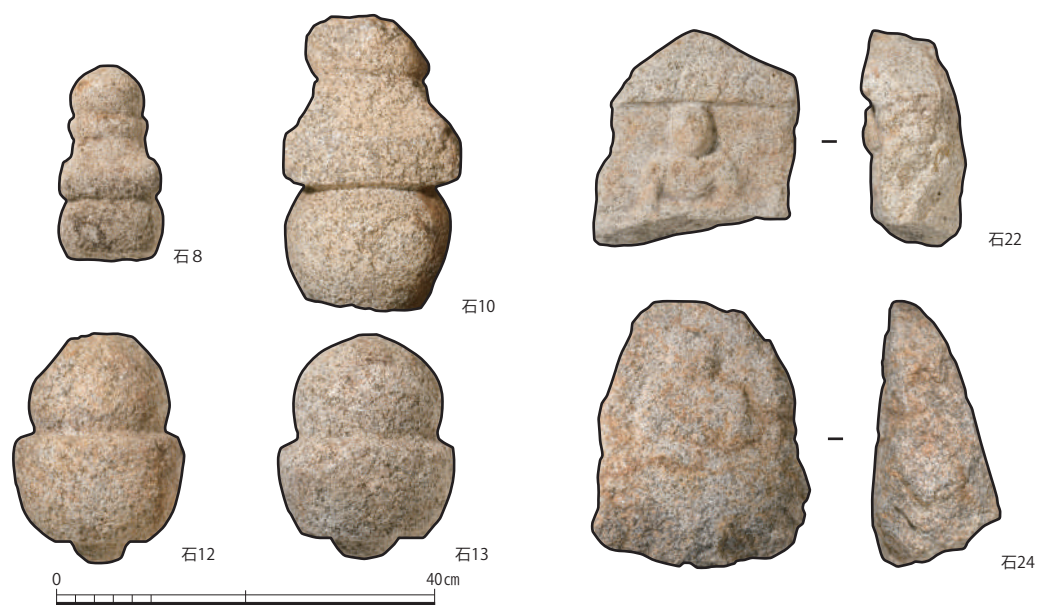


図17 石垣背面から出土した石塔・石仏



図18 方広寺境内に残る金輪（左、内径149cm）と大仏蓮弁片（右、縦189cm）
写真は京都市文化財保護課提供